

2016（平成28）年度

# 『原発事故被害現地学習会』 報告

日程：2017年2月25日（土）

開催地：福島県福島市各所

報告者：NPO 法人みみをすますプロジェクト みかみめぐる

主 催：浄土真宗本願寺派「御同朋の社会をめざす運動」北海道教区委員会

協 力：NPO 法人みみをすますプロジェクト、踏青楽舎、  
富岡町さくらサロン、浪江町北幹線第一仮設住宅

## 2月25日（土）

14:00～14:30

除染で出た汚染土などの仮置き場視察（福島市森合町「福島国税局」隣り）

前回と同じく現地コーディネーターは佐々木宗隆さん（踏青楽舎）をお願いして学習会をスタート。

最初に信夫山の公園から眼下にそびえる仮置き場を俯瞰した後、そばまで行って確認する。2015年に視察した時には黒い袋（フレコンバッグ）が次々と運び込まれていた仮置き場は、一年前の2016年には緑色のシートで覆われ、巨大倉庫のような眺めとなり、その大きさには圧倒されたが、一年経った今も同じ状態のままであった。通路を挟んだ向かい側には仮設住宅がひしめき、避難してきた先でも痛ましい生活を強いられている方達が存在していた。



14:30～16:00

『富岡町さくらサロン』訪問

ここは「福島市及び県北地区富岡町町民自治会」が2012年から運営するサロンで、今回も三瓶一義さんからお話をお聞きした。

三瓶さんは二日前の23日に富岡町に入って撮影してきた写真を私達に見せながら、避難区域が解除になるといっても、早々簡単には帰還することが無理であることを説明された。地震や津波で壊れたり、無人状態のまま荒れ果てた家々は、まだ取り壊すことも出来ていない。現在、新しい家は2軒しか建っていない。家の建て直し費用は、東京電力が固定資産税で評価をし、家を壊す費用は国が出すことになっているが、手続きその他が進んでいない。意識調査によると、3,500世帯中、帰るつもりと回答した世帯は16.7%しかいないのが実情とのことだった。

最後に自治会長さんが「6年経っても避難を余儀なくされた者達の生活は何も希望が見いだせず悔しい！！」と無念さをにじませながら語られた。



16:00 ~ 17:00

## 『浪江町北幹線第一仮設住宅』訪問

最後に、昨年11月に「ほっこり落語会」をさせていただいた第一仮設住宅を訪問し、集会場にて有志の方達10名余りにお集まりいただき、現在の心境などを聞かせていただいた。

200世帯の大きな仮設住宅だったが、現在は復興住宅などに転居していく人達が増えて、仮設の中に暮らす人達は随分減ってきたそうだ。そういう状況の中で、取り残されていく不安感がつる毎日を経験している方達の切ない気持ちは計り知れない。

避難してきた私達のことを他の人達は「沢山保証金をもらっているんだろう」と言うが、そんなことはない、元の生活を全て奪われ、必死な思いでこの6年間なんとか励まし合って仮設暮らしをしてきたのに、貰ってもないお金のことで色眼鏡で見られ続けていることが本当に悲しい。家族や友人と仲良く平和に、そしてお金がなくても慎ましく暮らしていられた6年前の営みを返して欲しい！！。こんな目に遭った者じゃないときっと判らないと思うけれど、どうか北海道に帰ったら私達のことを伝えて欲しい。

怒りと悲しみが混じり合う悲痛な叫びを複数の方達からお聞きして、唯々その胸中をお察しするしかなかった。私達はその眼差しを受けとめ、共に涙ぐむしか出来なかったが、北海道に帰ったら聞かせていただいたお話を周りの人達にも伝えることを約束し、最後に手を握り合ってお別れした。



2月26日(日)

浄土真宗本願寺派 東北教区相馬組

## 『東日本大震災物故者七回忌追悼法要』支援活動報告

会場：福島県南相馬市原町区 常福寺

「御同朋の社会をめざす運動」北海道教区委員会の方達や十勝組の方達、そして福島県中通りの関係者と共に、常福寺にて開催の七回忌追悼法要の支援活動に参加。境内のテントで法要に参加される方達に温めた北海道の牛乳やお菓子などを振る舞い、心を和ませていただく。今年は十勝組のお母さん達の参加で十勝名物の美味しいお汁粉も提供され、とても好評だった。毎年、外は寒さに震える状態だったが、今年は穏やかな天候に恵まれ、梅の花も美しく咲いて七回忌追悼法要に彩りを添えていた。

中通りからお手伝いに参加してくれた川俣町の高橋さんが浜通りの南相馬の様子を知る機会にもなった。法要終了後に南相馬のお寺のご住職がご自分が避難した当時の事を話してくださり、共通の知り合いの名前にご縁を感じた様子だった。



相馬組では七回忌をもってこの法要を終了させるそうだが、毎年境内で支援を続けてきた北海道教区の方達に対して相馬組の組長様から感謝の気持ちが伝えられた。色んなご縁が紡がれていく中、昨日お会いした仮設の方達の幸せも祈りつつの活動となった。



## [感想]

特にお願いして十勝組の白井さんと川俣町の高橋さんに感想文を書いていただきました。ご協力に感謝いたします。

## 被災地の声を聞くツアーに参加して

浄土真宗本願寺派 十勝組 光明寺 白井教生

2月25日から27日迄の三日間、福島市、南相馬市を訪問しました。初日の午後に福島市に入り、以前十勝組研修会にも講師でお出で戴いた、佐々木宗隆さんの案内で、市内にある放射線を含む汚染土の仮置き場を視察しました。官公庁や学校、仮設住宅が隣接する中、国有地という理由から仮置き場としてこちらに保管されているとの説明があり、いつまでこの状態が続くのかという光景を目にし、参加者一同いたたまれない気持ちで一杯になりました。

その後場所を移し、県内二か所の原発避難区域から福島市へ避難されている方々からお話を伺う機会を戴きました。最も印象に残ったのは、原発被害者は東京電力や国から、多額の賠償金や保障金を貰っていると思われる偏見が非常に辛いと、涙ながらに訴えられていたことです。

実際には満額を受け取ることも出来ず、保障金額の査定の方法についても、様々なハードルが存在し、皆さんの苦悩をお聞きする事が出来ました。

また、仮設住宅の老朽化に加え、自宅の整理もしなくてはならない現状に、高齢の身としては体力的にも経済的にもどうする事も出来ない事。また、若い人が町から離れて新居を構えて離れ離れになった事に対して、「引き裂かれた家族の仲を返して欲しい」との声には返す言葉もなく、大変長い沈黙が被害者の切実な思いを表わしていました。

「どうか、この現実を北海道に戻られたら、是非伝えて欲しい」との避難者からの言葉を胸に、仮設住宅を後にしました。

二日目は、南相馬市原町区の常福寺を会場とした七回忌法要での炊出し活動を行いました。十勝組は、十勝産小豆とジャガ芋で作った芋団子を使用した汁粉の炊出しを行い、参拝者に振る舞いました。

十勝から参加された婦人会の皆さんのお蔭により、納得した状態で提供する事ができ、口にした参拝者が喜んでくれた姿を見て、共に法要に参加できたという思いを共有させて戴き、大変有難いご縁でした。

三日目は、福島市内にある「児童養護施設アイリス学園」を訪問しました。

昨年春の二本松市のあおぞら市場の解散により、みみをすますプロジェクトの紹介でこちらの施設へ初めて支援物資を送らせていただいたご縁からの訪問でした。

現在、未就学児から高校生までの44名が在園し、育児放棄（ネグレクト）やDVによる児童相談所からの要請が多くなっているとのことで、子どもの人口が減る中で、入園する子の割合が多くなっていることを聞き、大変心が痛みました。

人間が人間として成長するためには、いかに家庭の環境が大切であるかという事と、地域も含めた見守りが



必要であるという事も改めて認識しました。

尚、同施設の側には除染作業の施設や汚染土の仮置き場もあり、大型ダンプが行き来する中での子ども達の通学や、地元以外の作業員が増えた事による治安の問題等、心配事も多いとの事でした。

震災から六年目を迎える今も尚、多くの方々はこんなはずじゃなかったのにと、行き場のない怒りと不安の中での生活を余儀なくされています。

時間の経過と共に、復興という言葉だけが独り歩きしていますが、現実とは程遠いと改めて感じさせられる中、悔しい思いや悲しい思い、やりきれない思いをされている事を実際に聞き、自分の目で確かめ、肌で感じたことにより、今一度、私達ができる事を考えてゆかなければと、改めて考えさせられるツアーでありました。

## 南相馬 常福寺 七回忌法要に同行させていただいて

高橋 多賀子

平成 29 年 2 月 25 日・26 日 北海道からお越しの皆様と同行させていただきました。

福島県伊達郡川俣町在住の高橋多賀子です。2 日間お世話になりました。

本願寺派の皆様とご縁が繋がったのは、昨年 9 月、『原発事故を風化させない』『福島の今を語る』を目的にチームカタリーナのメンバーとして、札幌の真宗寺様と室蘭の日笠さんの本光寺様でお話をさせていただいた事から、11 月に川俣での落語会のお手伝いをさせていただき、「みみをすますプロジェクト」のみかみさんからの声がけを機に、今回の同行が実現いたしました。

以前、みかみさんから南相馬でも活動している事は伺っておりましたが、法要を行っていらっしゃるとは存じませんでした。七回忌という節目にお手伝いさせていただき、大変ありがとうございました。

6 年の歳月が過ぎてもご遺族の方々の心の中は悲しみ色が薄れていないと察いたしますが、全国からあれほど大勢の御住職様がお越しになられている様子を拝見いたし、大変驚き、感動いたしました。

私の実家は宗派は違いますが、このような活動がなされているとは耳にしておりません。感謝の気持ちでいっぱいでございます。

また、不思議なことに初めてお会いいたしました皆様も気持ちの良い方々で、お寺で過ごした時間はゆったり穏やかな時間で、帰宅後も疲れた感覚もなく清々しい気分を感じておりました。なんとも不思議な体験でございました。

北海道の十勝からお越しの檀家のお母様方も、わざわざ遠路お越しくださるお気持ちをお持ちの方々でしたので、尚の事良い時間になったことは間違いございません。ぜひまたお逢いしたいと思っております。

それから、前日の浪江町の方達の仮設訪問の際には、同じ県民でも驚きの話を伺い、分断している場合ではない、いかに早期に 1 人でも穏やかな気持ちを、少しでも感じていただけるよう出来る事を考えなくては！と思い、川俣で暮らし、分断のさなかに心荒んでおりました自分に気づいた次第でございます。

何かを成し遂げることも、人を動かす力もございませんが、自身の醜い心を少し改善し、この地で、いろんな状況の複雑な思いの人と暮らしていこうと、ほんの少し自分の気持ちに変化を感じております。

貴重な経験をさせていただき、心から感謝いたしております。

ありがとうございました。



## [成果と課題]

今回の現地学習会は昨年に引き続き、一年を経た福島市内にどのような変化が見られるのか、見られないのかを確認する意味もあった。

避難区域が次々に解除され、帰還が順調に進んでいるかのような報道ばかりが先行する中、震災・原発事故から満6年となるこの時期に現地学習会を実施した意味は想像以上に大きかった。街中に山積みされていた仮置き場は今もその姿を留め、仮設住宅に押し込められてきた人々は悲鳴のような声を発し、家族関係、友人関係、地域関係は、分断につぐ分断を生んでいる。

原発事故がもたらすものが、これ程までに人の心を蝕んでいくものだということを教えていただけたことは、現地学習の場に足を運んでこそ得られたものであり、苦しい時期にこそ人は人に呼ばれるものであるのかと痛感させられた。

現地コーディネートを引き受けてきた福島市の佐々木さんご自身が、仮設の方達からのこんな悲痛な胸中を聞かされたのは初めてだとふり返っておられたし、川俣町の高橋さんは、川俣町にも起きている分断の苦悩を仮設の方達の思いに重ね、ご自分の心の有り様をまず再生しようと思立っておられる。原発事故の当事者側である方達と支援側の私達が協働していく大切さが再確認出来たと思う。

またこの学習会に十勝組の女性達が参加したことで、聞き取りをさせていただく現場も、七回忌追悼法要の境内にも、柔らかな空気が備わったことは特筆すべきである。

人は、人との営みの中で生まれ、生きていく喜びを見いだして人生の荒波に耐えていく。2011年に起きた東京電力福島第一原発事故は、私達全ての者達に、「人生の営みの大切さとは何か」を突きつけた事件である。問題の本質がごまかされていくことの無いように、私達は常に放射能汚染の問題を考えつつ、健康被害を軽減させることや、悲痛な生活から一日も早く抜け出すことが出来るような社会制度の必要性も、皆で考えていかなければならない。

原発事故によって起きている複雑な貧困問題を、現地学習会の場で私達はあらためて教えられた。これは決して他人事ではなく、継続的にしっかり向き合わなければならない日本社会の課題である。

(文責) NPO 法人みみをすますプロジェクト 代表 みかみめぐる

注：みみすまは、むすびば時代の2011年当初から、本願寺派のお寺関係者と連携して被災者支援活動を行ってきました。

2013年からは本願寺派北海道教区の組織的な保養受入活動「ほっこりプロジェクト」のアドバイザーに就任。

その後、保養に限らず様々な支援活動を協働していく中から、お寺と市民の社会貢献のあり方を模索し続けています。